

## 育緒×千葉桜 洋 トークイベント

20180623 (土) 大阪二コンサロン19時~20時

司会／

はい。みなさん、こんばんは。

育緒／

こんばんは。

司会／

写真家の千葉桜洋さんと育緒さんのトークイベントを始めます。

表から入ってきていただいた方は、えーと、あそこのサービスセンター側の扉、これは閉まっています。そちらより向こうには行けないので、お手洗い行かれる時は、一回こちらの扉を出て外へ行けるようになっていきますので、はい、よろしく願い致します。

それと、宣伝です。写真集、はい、遅くいらっしゃった方、ちょっと全部展示ご覧になれなかったかもしれませんが、で、この展示よりもっと多い数の写真が入っています。結構、あの印刷のクオリティも素晴らしくって千葉桜さんが自費出版で出しました。

育緒／

はい。えーと、今日の説明、三浦さんの方から少しね。

三浦／

はい、皆さんこんばんは。プラスヴォイスという会社の僕もカメラマンをやっています。

それで、聞こえない人は目で情報を得ているというところからですね、視覚的な能力を生かすという意味で、カメラマンの育成活動なんかしているんですけども。まさに千葉桜君がこういう形で素晴らしい作品を出してくれて、すごく嬉しく思っています。

今日は聞こえない方もいらっしゃるので、難聴の方には文字で、ろう者の方には手話で。またですね、話している声を、機械がですね、音声認識、自動翻訳しています。

ですから、時々間違った誤変換なんかもあるんですけども、今の技術はこのくらいの技術になっているんだってことをね、見て頂きながら、千葉桜君の声にはリスピーカーの人が発話をして、その音声認識で表示させているということですから、実際の話している声とはちょっと内容とちょっと違う表現をされる、そんな場面もあるかと思いますがよろしく願います。楽しんでください。

育緒／

では、始めましょうか。

千葉桜／

はい。

育緒／

千葉桜 洋さんで、この今日の写真展の作家です。私は洋さんのお話を聞きつつ、あたしの思いも伝えつつ、喋っていきたいと思います。よろしくお願いします。

千葉桜／

こちらこそよろしくお願いいたします。

育緒／

もともと洋さんとわたしが知り合ったきっかけは、私が東京の市ヶ谷にあるカロタイプっていう、写真家が集まる場所がありまして、そこで写真教室の講師をやっているんですけども、そこでロラン・バルトっていう哲学者が写真について書いた本を、難しい本なんですみんなで一緒に読んでいきましょう、という講座に来てくれて。

その前にもカメラを私と一緒に作りましょうっていうね、ワークショップにも来てくれたんだけど、そのときはあんまり深い話もできなくて。

千葉桜／

うん。そうですね。

育緒／

ね。そのあと、その講座でいろんな話をして、すごく仲良くなって、いろいろ話だけじゃなくて、写真も、暗室によく入ってらっしゃったので、見せて頂いたりしながら、仲良くなっていきました。

あの一、洋さんは、私より少し年が上で、息子さんが今18才。

千葉桜／

はい、そうです。

育緒／

で、洋さんは耳、不自由だけれども、息子さんが自閉症。そして少し知的にも、精神年齢が今3歳ぐらいかな？

千葉桜／

そうですね。

育緒／

っていうぐらいの子供さんを奥さんと2人で育てておられます。

で、そんなバックグラウンドがあって、まあ、あの一自分の生活そのもの、毎日の子育ての中でずっと写真に収めて来たんですよね？

千葉桜／

はい。

育緒／

何年くらい撮っていましたか？

千葉桜／

この展示作品に関しては、4年5年くらい前からです。その前まではコンパクトデジカメで、息子を追いかけながら、動体予測っていうんですかね、こう向いてくるなって時に、バチって撮る。ただ写真の中では、ちゃんと目線があって、結構凛々しくて頭が良さそうな、そういう写真を撮っては喜んでいました。

育緒／

うんうん。

千葉桜／

実際に同じような自閉症の他の子供の写真も撮って、その子供の親に見せると、わ、自分の子供じゃないみたいだっていうのが。でもある時に、昔からフィルムもやっていて、そのフィルムカメラで、じゃー、試しに撮ってみようと思ったら全然撮れないんですよ。オートフォーカスでもないのでピントが合わないし。あと、子供は多動で動いてばかりだし、そこから今の写真作りが始まりましたね。

とにかく立ち止まって何か夢中になっている、あの、動いている時じゃなくて、息子が何かを感じて、水とか光、綺麗なものに、なんか自分がいいなと思う世界に会ったら動かなくなるとしてじーと見ていて、そういうところをとりあえず撮ってみる。動かないから撮れる、フィルムでも。で、その後、見ているもの、見ているだろうと思われるもの、とりあえず自分は分からないけど撮ってみる。あとは自分も待っている時間もあるので、じーっと5分とか10分見渡していると、初めはなんでもないものだったのが、あ、これいいかもって。石ころでも、なんでもいいんだけど。

育緒／

うん。

千葉桜／

それでそれも撮ってみる。そういうパターンでこの写真の作品作りが始まりましたね。

育緒／

ものすごい数の写真を本当は撮っていて、これはもう本当にそのなかのたった少しの一部でね。しかも、見て分かると思うんですけど、プリントのクオリティが素晴らしい、ね。今、正直あの、自称プロの写真家と言われる人たちも、ここまでのプリントは焼けないと思いますね。何千枚って焼いているでしょう、ね。

千葉桜／

そうですか、ありがとうございます。

育緒／

すばらしい。あのー仕事終わってから、洋さん毎日普通に仕事に行っていてね、それが終わってから、本当に2時間とか3時間、カロタイプに立ち寄って、暗室に入って、プリントして、おうち帰るのね。

千葉桜／

時には終電まで、とか。

育緒／

ねえ、終電まで頑張ってるね。

千葉桜／

まあ、でも途中で缶ビールとか飲みながら（笑）。

育緒／

飲みながらねえ（笑）それでずっと焼いては、あー駄目だ駄目だって言いながら、焼いたプリントなんだけれど、私もずっとフィルムしかやってきてなくて、かなりプリントには辛口なんですけど、とても素晴らしいなって思いました。

千葉桜／

そうですか。

育緒／

何がやっぱり素晴らしいかっていうと、写真そのものが、ちゃんと洋さんが持っている、耳が聞こえないってことを完全にプラスに転じているなと思ったんですよ。なんかねえ、見ているときに一瞬、やっぱり自分も音が聞こえなくなるような感じがするんですよ。で、そこから少しずつ、波の音が聞こえてきたり、風の音が聞こえてきたりするっていうのかな。

最初一瞬ね、すごく静かな静寂を感じるんですよ、静かな感じを。で、そこから急に突然気がついたようにバーって音が出てくるような、そういう時間の流れを写真の中に取り込んでいるんだなと思って。時間がね、時が流れるんですよ、写真を見ている間に・・・  
<突然、手話のみで話しかける> (笑)

千葉桜／

手話教えました (笑)

育緒／

「ちゃんと聞いているのか？」この手話、今日何回も出てきます、ツッコミね (笑)

千葉桜／

<手話のみで>大丈夫 (笑)

育緒／

いちいち (笑) あっこれ、大丈夫よ。これ冗談だから、打ち合わせしたときのツッコミなので。

<手話のみで>大丈夫 (笑)

千葉桜／

手話を使っていたから、一瞬声が出なかった (笑)

育緒／

そうそう、向こう (バックヤードでUDトーク音声認識を修正している方) が心配になっている (笑)

千葉桜／

すいません (笑)

育緒／

ちょっとね、意地悪でしょうかなと思って (笑) 私が手話で喋ったらどうなのかなと。覗きに来て心配して、イエーイ (笑)

で、それから何だろう、本当は多分、こうちゃん、息子の名前ね。

こうちゃんは多動だから、ずっと喋ったり大きい声出したりしているはずなのに、なんかこの写真を見ていると、とても静かなお坊ちゃんに見えるよね (笑)

すごく静かに見えていて、一つねえ、すごいなと思ったのは、奥さんの捉え方が素晴らしいなって思ったんですよ。

奥さんっていうか、こうちゃんのお母さんですけども、多分ずっとこうちゃんのこと、本当は見ている時間も長いんだろうけど、写真に収まっている奥さんって、こうちゃんを見ていなくて、すごい遠くを見ていて、なんかすごい、世界を見ている眼差しが映っていて、例えばこの後ろ姿にしても、ちゃんと自分の時間を持って自分の世界観を持って生きている。

千葉桜／

そうですね。

育緒／

ねえ、それを撮っていて。

千葉桜／

かみさんは、イラストをやっている人なので。

だから、自分もいつも待っている間とかは、どうしてもこうちゃんの場合は、どこそこに行きたいと言って、お父さんとかお母さんがだめだとか、じゃー行くっていったコミュニケーションを取りながらやるわけじゃなくて、もう自分の世界のままで、言葉も単語レベルは分かることもあるけれど、ほとんど会話にはなっていないくて、自分のペースのみで動いているので。

それを私とか、かみさんが後追っかけて、それで突然何でもないところで立ち止まって、何分とか。例えば、あそこの道端で立っている写真。あれは住宅街なんだけど、そういうところに10分とか、ずーとなんか立ったまま動かない。これ、結構時間長いんですよ、実際やってみると。

育緒／

そうね。

千葉桜／

かみさんはスケッチしていたりして、私は写真を撮っているというのがあったから、まだ、なんだろう、待つことができたみたい。

育緒／

何かその・・・障害を持っている子供の写真を撮って、それを人に見せるときって、というのはテーマが社会的に偏りがちで、「こんなに大変なんですよ」とか「こんなに頑張っているんですよ」とか「彼らもこういう表情するんですよ」みたいな写真を撮りがちなんですけれども、洋さんの写真はそれが全く一切なくて。

千葉桜／

私がそういう写真を撮りたくなかったというのがありますよね。

普通の家族と同じように。

育緒／

そのままの・・・

千葉桜／

ただ時間とか見方は変わっているので、それでカメラを通して普通に撮れば一般の人にも何か通ずるものが出てくるなって。

育緒／

だから・・・

- ・ 洋さんとこうちゃんの間にあるもの
- ・ 洋さんと奥さんの間にあるもの
- ・ 洋さんとこうちゃん奥さん2人の間にあるもの

っていう、いつも様々な「間」のものを撮っていて、ダイレクトにこれ見よがしに、何かを主観的に撮っているっていうこと、そういう写真が1枚もなくて・・・

風景の写真も自分で切り撮っているんじゃないで、こうちゃんが見ているであろう風景で、多分こうちゃんの心にこういうふう映っているんじゃないかな、こうだといいなーみたいな客観性がすごく映っていて、だから、見ていて、押しつけがましくないというか、疲れないというか見れば見るほど、こう新しいことがどんどん見えてくるのが素晴らしいなと。

やっぱり、まず生活するっていうか、自分が一生懸命生きているっていうことがあって、気がつけば作品が出来上がっていたっていうのが見えていて、まず作品を撮るぞ！写真家になるぞ！っていうことで、無理やり写真を撮っているのとは全く逆で、それがやっぱり素晴らしい作品になってくるんだなというふうに思いました。

千葉桜／

ありがとうございます。

育緒／

でもね、私ちょっと不満があるんやけど（笑）私が一番好きな写真が展示されてない！一番好きな、こういう海、海でこうなっているやつね。写真集にしかない。あれ、むっちゃ、楽しみにしてきたのに。

千葉桜／

はい、すみません。写真集の方に入っています。ここには入ってないんです。

育緒／

これ、営業トークだから（笑）見たい人は写真集買わな見れへんって（笑）

いや本当にね、素晴らしい1枚があって、ここ、私はね、私は、この写真が一番好きで。見えますか？これが一番好きで、何だろう、なんだろうな、すごい静寂感と静かな空気と、でも後（うしろ）からざわざわっと波が、波の音がじわじわと聞こえてくる感じ？すごいこの中でゆっくり時間が流れているっていう、平面的な写真じゃなくて、すごく立体的な世界が、その見た目のね、立体感じゃなくて、時間とか、にじみ出てくるものの立体感がすごいなっていうふうに思いましたね。

千葉桜／

ありがとうございました。なんか照れますねーこう褒められるのに慣れてないので、育緒さんには（笑）

育緒／

そうね、私普段口悪いからね、人を褒めないんですけど（笑）

千葉桜／

一つだけ今の話に関連したもので、私は暗室が大好きなんですよ。自分で焼いて。これモノクロの場合は赤ランプ下なので、聞こえない人でも一応ぼんやり見えるので、安心できたりします。んで、像がぼわーって上がってくるのが見えてくるんです。一方、同じフィルムでもカラーの場合は、完全に真っ黒になる。赤ランプでもダメなので。それが初めのきっかけでした、モノクロは。

で、まあともかく暗室の中で、育緒さんが今話していたように、私の場合は撮りに行くというよりは、一緒に生活していく中であっ！と思ったものを、風景を拾う感覚で撮っているの、焼いてみないことには分からないんですよ。狙って撮った場合はだいたい予想がありますよね。私もたまに出ます、狙って撮ってバッチリ！と思って。ところが暗室で焼いてみると良くないんです。写真が逃げていくような・・・

育緒／

うんそうね。

千葉桜／

ただ、これも撮っておくかという感じで撮ったものを焼いてみたら、もちろん、全部じゃないけど、たまーにソクソクするようなものに出会えたりします。

んで、写真の方から語りかけてきて、息子は面と向かってはコミュニケーションがあまりできないけど、暗室であがってきた写真を見ると、息子はこういうものが見たかったのかとか、この風景って確かにいいよねとか、結構会話ができています。

だから、暗室の中で、実際に対面している以上に息子と会話ができているというのが自分の中で一番大切なものとなっていますね。

育緒／

うん。

千葉桜／

会社の仕事やっていますが、そのあとでやるとすっきりして、ちょっとマインドフルネスみたいな…それで止められなくて、ずーと暗室作業をやっているんですよ。今回、その後をついて作品が結果的にできてきたんですけどね。

育緒／

そうねえ、その欲のなさっていうか、本当に好き好きでやっていて、最終的に形になったっていうのが。

本当に一番作品のね、作る上で大事なことだと思うんやけど。ほんま大変やったやろうなって思うんだけど。

洋さん、いつもニコニコしていてね、いろんな人の悩み相談とか受けているからね。

千葉桜／

そんなにニコニコしているのかな（笑）

育緒／

洋さんね、すごいんだよお、なんか1人でね、南米とか、旅行したりね。いろいろ面白いなと思ったのは洋さんね、コンサートとかにも行くのよね、ミュージシャンの。

聞こえないんだよ、でも行くんだって。

なんでかっていうと、体でやっぱり波動が感じられて、みんなが楽しそうに見ていたら、もうそれだけで満足だからって言って。ロックコンサートとか行っていたんのよね。

千葉桜／

最近はどうだか行けなくなっていますけど。若いときの話ですね、それは。

育緒／

すごいなあとあって、その吸収したいっていう気持ちをね。で、思ったんだけど、洋さんってとにかく喋りたいこと、伝えたいことが、次から次からあって。

千葉桜／

すみませんね（笑）

育緒／

飲みに行ったときも（笑）

千葉桜／

結構うるさいタイプですよ（笑）

育緒／

飲みに行ったときは、こういった通訳なんてのはないから。

私はもうバーと酔っ払って食べながら喋っている一方やから、唇読めないから、あんまり分かってないときもあるんだろうけど、もう、とにかく洋さんは自分の思いをどんどん喋ってくるのね。それが、素晴らしいな、すごい。

千葉桜／

迷惑じゃなかったですか？大丈夫？（笑）

育緒／

ううん、私の方こそ、ごめん（笑）

思ったんだけど、例えば外国、私は外国生活が結構長かったんだけど、語学が全然できない頃って、一方的に向こうが喋っていて何を言っているか分からない状態で、また何か特に英語勉強している人とかって、自分が下手な英語を喋るのがはずかしいとかって、なかなか自分の言いたいことを言わない人とかっているじゃないですか。

そういうときに、聞こえない人と、そういうのって、おんなじなんじゃないかなって。

例えばポーンと1人で外国に行った、でもそのときに何を言っているか分からない。音は聞こえているけど理解できない。そのときに、でも自分はこう思う、こうしたい、これを見てほしいって、どれくらい自分が自分を表現できるかっていうことで、めちゃめちゃ大事やなって改めて思って、うん。自分から喋る、自分から見せる、それはね、すごく今回ね、学びましたね。

その、その自分がこうしたい、ああしたいっていう気持ちと、写真を表現するときの表現方法のこの謙虚な、ものすごく謙虚な表現方法と両方がちょうどいいバランスで。

千葉桜／

写真の方は、まあ確かに、一見何でもない、気づかなかった感じばかりで、地味・・・

育緒／

そうそうそう。あざとさが全くないから。

あざとさがないっていうのが、多分写真の中で一番難しいレベルだと思うんですよ。何か自分が自分が出ていうエゴがない写真が、多分一番上にくると私は思っていて、その意味では、もうエゴがないって、こういう写真なんやなっていうふうに。

それ、東京の銀座、ニコンサロン銀座で、渡部さとるさんとトークされたときも、渡部さん同じことおっしゃってましたよね。自分が、自分が、っていう写真じゃない、むしろその対極にあるってその話を渡部さんがおっしゃっていたのを聞いて、やっぱりそうやなって。そう言えば、渡部さとるさんのところでね、渡部さんがやってはる写真教室で初めて参加したのよね。



千葉桜／

はい。その前まではずっと自己流でした。

育緒／

自己流でね、自分でやっています。

千葉桜／

もともと高校のときから山、登山をやっていたので、いわゆる山岳写真・一眼レフ、フィルムカラーみたいな感じから入って、それから、その後いろんな国を旅するようになった時は、コンパクトフィルムカメラ、ビクミニとか、リコーGRとか。あれも、一眼レフじゃないけど、結構いいんですよ。

育緒／

パシャパシャね、考えずに撮れるからね。

千葉桜／

なんとなく目で撮るような感覚で撮る。結構バカにならないんですよ、全然。

それから、だんだんフィルムでも自分で暗室やりたいなって。でも、ちょうど息子の障害があることが分かって、多動で、小さいから。自閉症の子って結構交通事故に遭う確率が結構高くて、飛び出しとか。だからいつも捕まえてなくてはいけない。

育緒／

うん。

千葉桜／

その頃は片手に小さいデジカメで、それでも私は写真撮るのが好きだったんだろうなあ、たぶん。それでも撮る。かみさんが、なんでそんなときに撮るんだ？って言われながら、やっぱ撮っちゃう性分なので。

で、今でも小さい子供がバーッと傍らを走って通り過ぎると条件反射で掴んじゃう。そしたら、そのお母さんが、知らない子供ですよ、いきなりその子の手を取ってしまって、あっと思ったら、お母さんがジロっと怪しい目で見て、いやいや、すみませんでした、って言うくらい（笑）

まーそういう中で撮っていたんだけど、ちゃんと暗室でやりたいと思ったのが、

育緒／

うんうん。

千葉桜／

渡部さとるさんの写真ワークショップ「2B」を知って。でも、聞こえない方は分かると思うけど、じゃーワークショップがある、受けてみようといっても、いろいろ考えてしまいますよね？聞こえないし、どうしようかなって。

ただ渡部さとるさんの場合は、エイ文庫「旅するカメラ」という本があるんですよ。その中で、自分も暗室ワークショップを始めたという部分があって、それが5人か4人ぐらいかなあー、こじんまりした感じでやっている写真があって、これだったら大丈夫かもと。あと、その本を通じて彼の性格もなんとなくわかって。

私にとっては写真家というと、どちらかというと、バリバリ、表に出て人をバンバン撮れとか、僕について来いとか、気が強いイメージがあったんですよね。だけど、渡部さんはそういう人じゃなさそう。

それでも勇気を出して「受けたいんだけど」と、すぐにはなかなか連絡出来なくて、ある時に渡部さんのグループ展があったんです。そんなときにえいやっと足をはこんで、筆談ボードを持って行って、「受けたいんだけど、大丈夫か」って、そしたら渡部さんがニコッと笑って任せなさいとか言って。

ま、実際にやってみると結構ずれがいっぱいあって、後が少し大変だったんだけど（笑）

育緒／

うんうん。

千葉桜／

それでも、そのときに、渡部さんがまずは受け入れてくれたというのが、ものすごくやっぱり感謝していますね。その時に、どうしようかな、難しいかもとかなったら、たぶん私は遠慮していたかもしれないので。

育緒／

そのときにね、なんかあ、たくさん撮った写真を見せたら、渡部さんが「すごいね！この透明感が」って言う話をね。

千葉桜／

それは今展示している、これらの写真のことですね。

育緒／

そう、それでロラン・バルトの言うところのね、「エクリチュールだね」って言ってね、そういう話をされたらしいんですよ。

で、そんなこんなで私がロラン・バルト読みましようっていう講座をやるっていうのを知って、じゃー、それに参加してみようっていうことで、言ってくれたのね。

だから何か繋がっていて、んで、しかも私もこの写真を初めて見せてもらった時に、全然渡部さんがそういうこと言ったなんてもちろん知らなかったんだけど、

初めて見たときに、私も「すごいね！透明感が」と全く同じことを言っていたらしくて、だから、なんかこう渡部さんにはね、なんか・・・

うん、なんか、あー同じ、なんか、写真に対する考え方が、よく似ているのかなっていうふうにねえ。

千葉桜／

そうかもしれません

育緒／

うん。まだ一度も一緒にお酒飲んだことがないんですけど、約束しつつ、まだ飲んでないので、今度3人で飲もうね。

<手話のみ>ちゃんと聞いているかいや？（笑）

千葉桜／

<手話のみ>はい（笑）

<手話のみ>大丈夫、真面目に聞いています（笑）

育緒／

実はね、私のね、今ね、ゼミに、彼女（と、トーク聞きに来ている彼女の席を指して）も耳が不自由なんだけれども、彼女も全然洋さんのことを知らなかったんだけど、自分でやってみようと思って来てくれはってたまたまね。で、やっぱり彼女の写真も、自分が耳が聞こえないっていうことを100%とプラスに転じていて、洋さんとすごく同じエネルギーを感じる。

千葉桜／

そうなんですか、機会があったら見てみたい。

育緒／

うん！持って来てはるかもしれんからね、あ、持ってきた？あとで見てもらいましょ。

なんかそれがね、私やっぱり何だろう、自分ができることを何でもやりたい。一緒にできることがあったらやりたいと思うけど、実は一方的に私の方が、なんかもおーそーなんやあって言って学んでいるっていうか、吸収していることが多くて、どちらかという、こう知らなかったことを逆に私の方がいっぱい見つけられるから、嬉しい（笑）なんかラッキーって感じ（笑）

千葉桜／

お互いに刺激を与えられるというのが。

育緒／

うんうん。

千葉桜／

良い関係ですよ。

育緒／

うんうん。特にだから写真って、そういう意味ではもっと、こう、耳が不自由な人がやるべきことの一つやなってすごく思ったね。

千葉桜／

私の場合は、写真を、さっきのワークショップでやってみようとなったのが48歳だったのです。ある程度いろいろ経験して失敗もして、若いときはとんがっていたとかあったけど、今は丸くなったというか、そういうのがいろいろ重なって、割と言えるようになってきた部分もあるんですよ。それが若い方とか、もうちょっと頑張っている最中だったりすると、なかなかうまく言えなかったりするだろうなとも。

あと私の場合は人の縁にも恵まれた部分もあるけど、本来はもうちょっとこういったサービスとかは、もっと気軽に受けられるようになったら、こうした、生きたワークショップというのにもっと参加しやすくなれば良いなと思いますよね。

育緒／

なるよね、そうねえ。

千葉桜／

写真っていわゆる、二コン、何だろう、カメラの技術とか、そういういわゆる普通の写真講座、テクニックとかそういうのはある程度、自分の独学でもできます。

だけど、こういった写真家をやられている方と一緒に写真を見せて、いろいろ意見を言っ

てもらおう講評会とか、そういうのが一番バリア高いんですよ。

でも、せっかくお金を払って講座を受けるんだったら、そういうものこそが一番重要なかなと思うんですよね。だから、そこで聞こえないとなかなか参加しづらい、というかやっぱり遠慮してしまうというのがあるので・・・

「聞こえない方でも歓迎」とか、「筆談、何でもサポートします」とか、それだけでも書いてあると、迷っている人が参加しやすくなる。

実際その後が大変であっても、そこは育緒さんが言っているように、講師の方もいろいろ学ばされたり、ぶつかったりしながら、作品作りの講評ができれば、両方にとっても何か良い化学反応みたいのが起きるのかなと思って。

育緒／

そうねえ、うん、その通りやねえ。

ところで、今回もう1人、カロタイプの森下大輔マネージャーがね、やっぱり大きな存在やったと思うんやけどね。彼がマンツーマンで、暗室の中でね、いろいろアドバイスしてくれたりしてと、写真集も彼のレーベルから出してんだよね。

千葉桜／

はい。さっき言っていた渡部さとるさんのワークショップ終わってからも、しばらくその暗室を使っていたんですが、それも使えない事情が出てきて・・・

さて、暗室をどうしようかと。

私の場合、家では暗室作れなかったんですよ。どうしてかというと、息子がともかく水が大好き。水になるものはとりあえず口に入れる、廊下とかにも水をバッチャーンってやるとか。暗室の液体って劇薬ですよ。あれ飲んだら、もう・・・

だからとてもできないので、外で、貸し暗室みたいのがあって、いろいろ探して、市ヶ谷にある、そのカロタイプへ恐る恐る行ってみたんです。そこは知らない、初めてのところだから、やっぱり聞こえないと緊張する・・・で、ドアを開けて入ったら森下さんがいて。なんか、森下さんって、多分みんなが見ればイケメン的な・・・

育緒／（笑）そー！イケメンエロ男！

千葉桜／とっても爽やかな顔で・・・（笑）

育緒／イケメンエロ男、色男じゃない、エロ男ね（笑）

千葉桜／色男じゃないのか（笑）

育緒／エロ男ね（笑）

千葉桜／勝手なこと言っていると思っているよ（笑）

育緒／（笑）エロ（笑）

千葉桜／

まーとにかくちょっと置いといて（笑）

その森下さんが爽やかに現れて、彼も私が初めて聞こえない人ということで、最初は戸惑いながらも、でもじっくり聞く人だったんですよ。で、とりあえず暗室で焼いてみたい、溜まったネガをベタ焼きするんだけど、これぐらい小さい・・・

育緒／

うん、コマのままのやつね。

千葉桜／

それを10枚ぐらい焼いたんですよ。森下さんはお手伝いする人だから、水で洗ったり、いろいろ乾かす作業する中で見てくれていたんですよ。そして終わったあとで、すごくいいですね！って言うてくれたんですよ。私の場合聞こえないから、お世辞でいっているときとそうじゃないときって、表情を見ればなんとなく分かるんです。

森下さん、その時もう頭を振りながら、いやぁ～すばらしい！と言ってくれて。そこから足が軽くなって、飲むのも好きみたいで、終わった後は飲めるなどが、そういうモチベーションもあって、なんとか続けられて。

育緒／

それ大事やね（笑） そうだよねえ。

本当に仕事してさあ、ねえ、こうちゃんの面倒もみて。

千葉桜／

ま、そういう感じでとにかく暗室で焼いてみると。で、森下さんの場合は、写真家としてはもうプロの人なので。私がどんな説明をしても、それはどうでもいい、いや、どうでもよくないまではないけど、それよりも写真そのものとしていいかどうかを見てくれた。私はやっぱりどうしても、撮る人の思いが入ってしまうんですね。これでもなるべくない方だけれど、知らずに思いが入ってれば、やはり説明しちゃうし。だけど、それ以前に、ちゃんとこれが写真としていいかどうか、というのは常に言ってくれる人だったので。

ずいぶん学ばされました。今回展示するときの写真選定や並び方とかは、半年ぐらいかけて。4年か5年ぐらいで、んと、これぐらいの大きさ・・・6切りサイズで800枚ぐらい溜まったんですよ。

育緒／

800枚ってすごいよ。

千葉桜／

そんなに大したことないです（笑）

育緒／

いや、でもね、フィルムだからね。デジタルじゃないから。

デジタルなんか1日で何千枚って撮るかもしれないけど。

千葉桜／

1年間で200カットぐらい？まあ溜まっていったので、じゃあそれでちょっとまとめましようとなったのが、去年の夏ぐらいでそこから半年。

この二コンサロンの場合は、2ヶ月ごとの応募だった。だから、もっと早く出す予定だったんだけど、やっぱり子供の状況とかで延び延びで。それでも、審査とかが厳しく、それに通る作品までを作るのが大変だけど、全部自分だけのペースでできるのがあって。

皆さん、普通はグループ展とかで、ひとまずやってみようというのがあって。私も何度か誘われたんだけど、グループ展の場合は、みんなでレンタル料のお金を分担して、それで

在廊する日とか、いつまでとかも決まっているので、息子の件でどうしてもドタキャンとか起きたりすると・・・

育緒／

そうねえ。

千葉桜／

それでなかなか何回か参加しようと思ってもできなくて。

そしたら森下さんとか渡部さんは、私の場合はもうちゃんとしたプリントがたまっているから、40、50枚できちんとストーリーも作ってニコンサロンとかに応募した方がいいって言われて、それで今回やったんですよね。

育緒／

大分森下くんにね、尻叩かれていたもんね？

千葉桜／

はい（笑）

育緒／

ちゃんと応募したら何か、ね。「締め切り・・・」なんか名言があったね？

締め切りは・・・天から降ってくる、とかなんか、そんなこと言ってなかったっけね？

（笑）

千葉桜／

天から降ってくる・・・あー思い出した（笑）

育緒／

なんか森下くんが言っていたよね？

千葉桜／

森下さんの言葉、あー

育緒／

そうそうそう！

千葉桜／

なんか、森下さんの言葉って独特なんですよ（笑）

育緒／

そうそうそう！すぐそういうことを言う、彼はロマンチストやからね。

千葉桜／

「締め切りはすばらしい」とかの意味だったかな。

育緒／

そうそう。だから一度ここまでの間にこれだけの結果を出すっていうことをやるようにと  
言っていて、ずっと、ね。

千葉桜／

特にアート活動とかしていると、ダラダラモードになってしまいがちで。

育緒／

そうね。こんだけ長いと、どこまででも伸ばしていく、いこうと思ったらね。

千葉桜／

らしいですね。

育緒／

でもね、たくさんの写真の中から選んでいるんだってというのが、やっぱりね、分かった  
ので。今ね、正直ね、いろんな人の写真展を見ても、あのね・・・こう・・・40点、そ  
ろわない人が多いね。一つのテーマで、40枚きちっと選び切れるっていうのは、あんま  
りそういう写真家がない・・・ですよ、正直なところ。

しかも例えば30枚なら30枚でもいいんだけど、100枚の、この100枚どれをとっ  
てもいいけど、そん中でこの30枚っていう人と、もう35枚から30枚選んだ人と写真展  
の質が違うので。やっぱり、洋さんは、そういう意味で、今日この写真展や写真集には入  
ってない写真で、めっちゃめっちゃええやつとかあって、何でここに飾ってないんやろうかっ  
て写真もあって、すごく贅沢なバックグラウンドから生まれている写真展なんですよ。  
それってやっぱり、にじみ出てくるので。これどんどん膨らまそうと思えば、いくらでも  
膨らますことができる。

で、これ並べる順番とかは、森下君がわざわざ大阪展示の前日に来たのよね、東京から。

千葉桜／

私は会社でこの大阪ニコン展示の搬入には行けなかったんですけど、その時には森下さん  
が代わりに来てくれました。

育緒／

うん、東京からね。

千葉桜／

ずーとこの展示場でいろいろ見くらべていたようで、しかも銀座のときと比べて4枚抜い  
ています。並びもちょっと変えています。

当初は銀座のニコンサロンと同じ並びでという話だったんだけど、森下さん自身が、ここ  
の空間、あと隣の写真展がカラーだから、表に大きな写真をバーンって置くとか、いろい  
ろ考えられたみたいなんですよ。

育緒／

あいつ何やってもいい加減やけど、写真に関しては真面目やもんね。森下大ちゃんはね、  
何をやってもいい加減な男やけど（笑）

育緒・千葉桜／

写真に関しては（笑）

千葉桜／

すごいパワーというか、すごいストイックなんですよ。

育緒／

そう、唯一それだけやけどね（笑）

千葉桜／

あともうちょっと、何だろう・・・もうちょっとアピール能力があればと思うことは確か  
にありますけどね、森下さん自身。

育緒／

ねえ。なまじっか、イケメンやから（笑）

千葉桜／

まあ、あえてあまり言わないというところが、写真家なのかなって感じもしますけれど。

育緒／

そうねえ。でね、プリントのね、トーンがね、全て何か揃っていてこれもすごいなと。1枚1枚が抜群にうまいっていうのだけでは足りなくて、展示って流れがあるからトーンが一つ一つ全部こう揃っているっていうことに、どれだけやっぱり真摯でいられるかっていうのは大事なことなんですけど。

これは本当にトーンが見事に綺麗に揃っていて、やっぱりその辺がね、プロ中のプロみたいな写真展ですよ、これ本当に。もう何か百戦練磨か、みたいなプリントのトーンですよ。これは本当にもう1回みんなね、そう思って見てもらったら、また、違うものが見えてくるんじゃないかな？っていうふうに思いますねえ。

千葉桜／

私の場合、撮るパターンがある程度決まっちゃう。息子のあとをついていくという制約は、言い換えれば、ある意味、息子のおかげで、こういう作品ができていうのもある。

そこはすごく感謝している部分もあるんですけども、もし、じゃー自分1人だけで写真撮るって、息子がね、離れてとか、それで撮りに行くとかになると、それでどうなっていくのかというのが、ちょっと全く分からない。

育緒／

うんうん、でもそれを次は見てみたいね。

千葉桜／

そうですね（笑）

育緒／

次のステップやろうね、きっとね。

千葉桜／

分からないけど、息子がいなくても多分息子の見方に乗っ取られたままで撮っているかもしれないし、全く違う形になるかもしれないね。そこは正直本当に分からないですね。

育緒／

そこが本当に何か楽しみな次のステップやねえ。そう見てみたいって思う、思うもの。次のそっちの、ね。っていうのか今が18歳だから、もしかしたらそのまま施設とかでね。

千葉桜／

30才ぐらいまでは、たぶん今のままとそう変わらないだろうけど。その頃から多分、自分の時間もある程度できるようになるから、ここからですかねえ・・・本来の自分の写真が何だろうって、なるのかもしれないね。

育緒／

そうねえ。でもまず自分、自分がどう生きるか、どう考えるか、っていうこと洋さんで必ず考えるでしょ？

まず考えて、それで生きて、自然にと、どう写真に反映されて、どう出てくるかっていうふうに、いつもそう物事を考えるでしょ。それが、やっぱり素晴らしいなって。

まず何か作品、作品を作るぞとか、どんな作品作るかっていうことじゃないところが、やっぱりいいなって私は思いますね。



育緒／

時間って、大丈夫ですか？全く、私達放し飼い状態で喋っているやんけど？

あと5分？あと10分くらいね。うんうん。写真集、何冊印刷した？

千葉桜／

800部です。私の場合は、3000円以上売るのはちょっと申し訳ない感じがあって。私、写真集がものすごく大好きなんです。いっぱい買っているの、よく分かっています。2800円とかで、割とソフトカバーてな感じで。

育緒／

うん

千葉桜／

寝転びながらも気軽に見られるような・・・そういうコンセプトで作りたいなと思ったんです。

あともう一つ。森下さんが自分で出版社みたいなレーベルを立ち上げて、そこで自分の写真集を自費出版で作ったんです。その時にお世話になった印刷会社とかデザイナーさんとも繋がっていて、私の作品が二コンサロン審査に通ったときに、森下さんが私の写真集を作りたいと言ってくれたんですよ。

育緒／

うん

千葉桜／

他の人の写真集は初めてで、まだあんまり慣れないかもしれないけど、私の写真に対する思いだけは誰にも負けないという言い方をされて（笑）

育緒／

あのやろー（笑） そうそう、そうなのね、なんか一緒に、印刷所に立ち会いに行ったりしてね、なんか一生懸命写真集作っていたのを見ていて。

千葉桜／

ま、そういうわけで、写真集も作りました。

育緒／

うん、あのねえ、これ、良い写真集なんです。よ。

本当に何だろう・・・私、絶対ね、営業トークしないんですよ。殆んど、この写真集いいですよとか買った方がいいですよとかって、言わないんですけど、これはね、買った方がいいと思う。すごく勉強になるし、あと、何か寝る前とかに見ると、よく眠れる（笑）

千葉桜／

本当ですか？（笑）

育緒／

ほんと、ほんと。なんかね、わかるでしょう？これね、だんだんフォワーンときて、コクって寝るっていう。だからソフトカバーにしたんやと思うよ（笑）

痛い痛いってならへんから（笑）

千葉桜／

今回展示した写真でも、森下さんと選ぶときに、私自身これは出したい、でもこれは流れで合わないからとか、そういう写真も結構あったんですよ。1枚の写真としてはすごく良いというのはお互い認めても、どうしてもここにははまらなかった。

で、写真集を作るときはそれも混ぜて作ろうと思って、それだったら写真集を作る意味があるなって。なので10枚ぐらい入れ替わっているんですよ。展示にあるものが写真集にはなくて、逆に写真集にないものが展示されていて、そこは、バラバラになっていて順番も変わっています。

育緒／

左のページとかに、言葉を入れているのは、あれは誰のアイデア？  
言葉が入っていたでしょ？ストーリーの文字を入れていたでしょ？

千葉桜／

はい、左側に日本語と英語。

育緒／

そうそう、言葉、うん、言葉。あれは誰のアイデア？

千葉桜／

言葉自体は私ですけど。

育緒／

写真集のこの・・・これ！こういうやつ。これは、誰のアイデア？最初にこれやりたかったのは洋さん？

千葉桜／

あの展示キャプションがベースですよ。あー、キャプションをばらして、1枚毎写真の左側に各文をいれると言うアイデア？

育緒／

うん。

千葉桜／

あーそれは、私でした。

あのキャプション、展示では全文ひとまとめになっているけど、写真集の方では、各文節毎にばらして左側ページに置いて、右側ページに写真を置くパターン。

それから、だーと写真だけが続いていく構成になっている。

育緒／

うんうん。

千葉桜／

んで、最後の部分、この展示にはないキャプションを2つ入れました。

育緒／

なるほどね。

千葉桜／

暗室で感じていたこととかも。最後にまた新しい言葉が入っているでしょ。

こういった文と写真の置き方パターンみたいな構成は私の方で、森下さんにも話したら、それはいいねっと。

ただ森下さんの方は、じゃー、その一文に対する写真は、あまり言葉通りじゃない写真を組み合わせたいと言ってきました。だからちょっと左右の言葉と写真が違うんですね。あまりにも説明的にならないような、でもなんとなくわかるような。あのあたりの編集は

森下さんのセンスですね。

育緒／

うんうん、そっかそっか。それもね、ぜひ、そのところがね。まさに言葉と言葉が写真を縛り付けることもないし、写真が言葉を拘束することもなく、何か絶妙にね、なんか、こう流れていくので、それも楽しんでもらえるんじゃないかなって思うんですよ。ね？

千葉桜／

ありがとうございます。

育緒／

（笑）あと何か喋っておきたいことあったら、とか？あと皆さん何か聞きたいこととかあります？ないの？なんかないの？

千葉桜／

なんでもいいですよ。作品のことじゃなくても。

育緒／

ないのか、やっつるぎ？ないの？あららら・・・大丈夫なのかな。

まあだいぶ喋ったからね。

千葉桜／

じゃー時間かね。

育緒／

こんな感じにしときましようかね。

まあ、ね、しといたろか、これぐらいに？（笑）わたし、悪い事言いたくてしょうがないねんけど、実は今日ずっと我慢してんねん（笑）

前のロラン・バルトのゼミのときも、UDトーク使ったんだよ、実験的にね？

千葉桜／

うん、ゼミの時。

育緒／

そう、ゼミのときにね。そのときね、なんかね。おっばい、おっばいとかね（笑）

なんだっけ？UDトークの方は「おっばい」じゃなくて、「お、いっばい」とか出てくるんです、何か妙にお行儀がいいのよ（笑）以上（笑）

質問者F／

すごく楽しいインタビュー、ありがとうございます。

ぜひちょっとお聞きしたいなと、写真家としてもですけど。

何かお2人それぞれに、何か、何でも誰かが言ったことでもええし、何か感づいたことで、写真とか写真を撮ることについて、こういうことなんやなとかの、なんかすごい言葉があれば、何か聞いてみたいなって。

何か気づいたこととか、誰かが言ったことで、すごい印象に残っていることとか、そういう言葉が何か自分達の心の中にあるならば、何かそれが何なのかなって聞いてみたいなっていうのはあります。よろしくお願いします。

育緒／

私はね、ダイアン・アーバスっていうね、アメリカの写真家が、英語言うけど大丈夫？  
「Nothing is ever the same as they said it was. (It's what I've never seen before that I recognize.)」っていう、なんか、同じものは二度と、あの、目で見たと写真っていうのは、もともとあったものと、決して同じじゃないっていう言葉を、ダイアン・アーバスが言っていてそれが好きですね。

千葉桜／

うーん、まず最新のごく頭に残っているのは、育緒さんと一緒に読んだロラン・バルト『明るい部屋』に・・・「写真は光線の宝庫である」という言葉があって。

私はずっと暗室をやっているの。写真を撮るときに一回光をフィルムに閉じ込めて・・・でもそれだけでは写真にならず、暗室でまたフィルムに光を当てて印画紙に焼き付けて初めて人間の目に見える、という、その繰り返しの中でずっとやってきたので、そのバルトの美しい言葉を読んだときに、救われた感じがしました。

育緒／

よかったあ

千葉桜／

救われたというのはオーバーかもですが（笑）

育緒／

いやいやいや、よかった（笑）

そんな感じで大丈夫ですか？はい、じゃあ、じゃあ本田君、お願いします。

司会／

はい。では、ありがとうございました。これでトークショー終わります。  
どうも皆さんありがとうございました。  
（拍手）